

写真の木は、150年生でした。江戸時代から明治時代への変わり目に生まれた木は、カシノナガキクイムシ（通称カシナガ）という体長4mm程度の虫のマスアタック（大量穿入）によりひと夏で枯れてしまいました。彼らが狙うのは、こうした高齢化した大きな木である傾向にあります。

ナラ枯れ対策は、伐って使って森を若返らせる



前号で紹介したとおり、カシナガは木を食べているわけではなく、食糧とする菌類をメスが持ち込み孔道内で繁殖させ、成虫も幼虫もこの菌を食べて成長します。羽化して成虫になっても、すぐに木の中へ入るようです。カシナガ本体を目にすることは、難しいです。

カシナガ対策は、枯れてしまった木だけでなく、生きていた木も含めて虫の生活圏を断つことで初めて予防と対策につながります。かつて人々の生活が森林と密接にかかわり、木を大事に使っていたときは、暮らしそのものが森林病虫害の予防と対策になっていました。

ナラ枯れ被害の予防と対策とは、木を使う社会へとつなげ、被害が起きる前から森林を伐採・活用し、意識せずに森林の世代交代を日ごろから行うことにあります。

対策で最もやってはいけないことは、「伐倒駆除（くん蒸）」と称してビニールに包んで薬剤散布し駆除した気になって小手先の対応だけで安心してしまうことです。



2017年に宇都宮大学が小谷村でカシナガの調査を行い、そのとき仕掛けた捕虫器具（カシナガトラップ）に掛かった成虫。トラップを使わないと、カシナガを見ることは難しいです。（2017年8月24日 中谷）

◎ カシナガの生活圏を断つためには

被害地周辺のナラ類を生木・枯木にかかわらず一体的に伐採し、その場所から運び出し加工・利用することが必要です。**生木を残すことは、カシナガの繁殖地を残すことになるからです。**「伐倒駆除（くん蒸）」のみで対策することの問題点は、そこにあります。また、使える資源を使えなくしてしまいます。

その際、他の樹種はむやみに伐採せず残しますが、ナラ類の伐倒のために伐採せざるを得ないものもあります。



広葉樹は市場価値があるので木材市場へ（2017年5月14日 中谷）

◎ 運び出せない場合は？

カシナガの食糧となる菌が繁殖しにくい状態、もしくは他の菌が活発に繁殖しやすい状態へ誘導します。

- ◎ 水が溜まって湿潤状態になるようにしたり、キノコの菌が付着しやすいようドリルで穴を開ける。
- ◎ チェンソーで辺材の厚さ分の切込みを縦に5～10cmおきに入れる。カシナガの幼虫は、切込みの断面から落ちると、二度と戻れなくなり死ぬ。
- ◎ 伐倒する場合、50cm程度に玉切りし腐りやすいように地面に伏せる。



カシナガの暮らしは辺材なのでそこを狙う（2017年5月4日 中谷）

◎ 伐り株の処理は絶対に忘れずに！

カシナガのマスマック（大量穿入）は、根元が最も多く徐々に上がっていきます。

伐り株は運び出せないなので、運び出せない場合の方法と同様の処理を行います。

翌年以降、マイタケの発生があるかもしれません。



横に伸びた根にもカシナガの穿入痕がある（2023年9月11日 黒川）

◎ 薬剤は使わない

ナラ枯れ対策のマニュアル等で紹介される薬剤は、注入後に化学変化しガス化・拡散することで殺虫する効果があるのですが、宇宙服のような防護服を着ていないと人体に影響があります。

2017年の被害地で実践したところ、1ヶ月ほど全身のかゆみが続き大変でした。薬剤のガス化は、作業者もくん蒸されてしまう、ということです。

さらに、翌年以降は、ムキタケ、ナメコ、マイタケのようなキノコの発生が期待されるため、薬剤は使わないようにしましょう。



施業後2年目に伐根から発生したマイタケ（2019年10月6日 中谷）

◎ 対策は翌年の5月までに終わらせる

今年被害をもたらしたカシナガは、来春まで出てきません。このことは、翌年以降の被害を抑え込むチャンスでもあり、さらなる被害拡大を招きかねない危機でもあります。

成虫が出てくる5月下旬までには、枯木の処理を完了させる必要があります。より望ましいのは、サナギになる4月中旬までです。生木は、その後でも構いません。



ナラ枯れ被害地の一体的施業の事例は全国で小谷村だけだと思われる（2017年8月20日 中谷）

被害木を見つけたら
役場へ情報をお寄せください。

次号予告
未定